

---

# 最優の鍛冶師

夢魔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

最優の鍛冶師

### 【Nコード】

N1594V

### 【作者名】

夢魔

### 【あらすじ】

剣の道に生きる女子高生『仙道茜』は嫌悪する幼馴染の異世界召喚に巻き込まれ剣と魔法の世界『セレスティア』に到ってしまう。召喚された異世界人には元の世界の神が一柱だけ守護神として憑く決まりなのだが、茜を見初めたのは直接的な戦闘には不向きな製鉄・鍛冶を司る神『天目一箇神』。だが、超前向き思考な茜は帰還の手段がないと分かるや否や即断即決、剣士兼鍛冶師として異世界で生きていくことを決意する。主人公を巻き込んだ張本人は勇者として立身出世し自分だけのハーレム形成を目指していますが、主人公

は関知する気が更々ありませんので悪しからず。

「それで、何故貴様は此処に居る？」

私にもう付き纏うなと申し渡した筈だが」

何時も通り部活動の範囲での練習を終えた部員を見送ってから一人自主練をこなした黒髪の大和撫子『仙道茜』が剣道場を出ると、金髪碧眼の美青年が校門に寄り掛かって彼女を待ち構えていた。

彼の名前は『鬼道直也』。

茜も本心では認めたくはないのだが、『仙道家』と祖を同じとする『鬼道家』の嫡子で、由緒ある仕来りを守り続ける仙道家とは異なり、時代の流れを汲んで企業として成功を収めた俗に言う成り上がりの家系である。その鬼道グループ自体も優良企業とは名ばかりで裏であくどい商いをしたり、果てはヤクザとも深い繋がりあるなどの黒い噂が絶えない。

茜と直也は所謂幼馴染の関係だが、今の美少女・美女ならば誰彼構わず口説き食い物にする下種な趣味を晒すようになってからは距離を置き口を利かないようにしていた。

が、年下から年上まで複数人の彼女がいるというのに茜にしつこく言い寄ってくるのである。そのせいで直也の本性を知らないファンが多いこの高等学校では女友達はできないし、彼女達を敵に回したくない男子共は明らかな嫌がらせも見て見ぬふりをするなど、彼女にとっては踏んだり蹴つたりの学校生活を強いられていた。

その元凶が一度懇切丁寧に迷惑だときっぱり告げたにも関わらず目の前に再び現れたのだ、その厚顔無恥さに不機嫌になるなどという方が無理だろう。

「へえ、この俺が態々こっちから声を掛けてやってるのに相変わらず酷い言い草だな」

「誰も頼んでいない。

私なんかに構っている暇があったら沢山いる恋人達の処に行ったらどうだ？」

「嫉妬か、茜？」

何時も言ってるだろ、本当に愛しているのはお前だけだつて。何なら付き合っている奴らと今直ぐ別れたっていいんだぜ？」

「止めてくれ、私が刺される」

何故世の女共は、確かに容姿端麗で文武両道ではあるが、この上なく口先だけの最低男に悉く絆されるのだろうか。歩く二宮金次郎像なんかより余程七不思議に相応しいと思うが。と、常々考えている茜であった。

心の中で深い溜息を吐く少女には同情するしかないとして、問題なのは直也の思考回路だつたりする。先程の嫉妬云々の台詞は冗談などではなく思ったままのことを口にしていたのだ。

彼にとって女性とは自分を愛して当然の存在で、特別視している茜もその例外ではない。よって彼女が拒絶するのは単なる照れ隠しや嫉妬なのだとは本気で思い込んでいるらしい。

「まあいいさ。それより、偶には一緒に食事でも行こうぜ？」

「それも遠慮させてもらおう。」

「この後、祖父との稽古の約束があるからな」

「……………っち」

茜の祖父『仙道誠一郎』は現代に生きる武士とまで言われる高潔な人柄で、警察や政界にも太いパイプを持つ大物中の大物。両親が幼い頃に死去した少女にとつたは親代わりで、人としても剣士としても尊敬できる傑物でもある。

自他共に厳しい誠一郎とは根っ子から水と油の関係である直也が何も言い出せず舌打ちしたのを茜は冷めた目で一瞥し、校門を潜り抜けようとした。が、突然肩から下げていた剣道の装具一式入った袋が凄まじい力で後ろに引っ張られる。

「直也ツ！何をツ！？」

「茜、助けてくれツ！！」

「！！！？」

当然彼女は張本人に抗議の声を上げるが、直也の慌てふためく声を不可解に思い後ろを振り向くと、彼の下半身が光の渦に嵌り今もずぶずぶと飲み込まれていくという奇怪な光景が目に入ったではないか。

茜にしてみれば離すのは造作も無いことだし、こんな女をとつかえひっかえするような屑を助ける義理もない。だが、生来の優しさからか彼女はそれを実行しなかった。

「ひいッ!?!」

「もう……………駄目だッ!?!」

そして努力の甲斐なく、光の渦に呑み込まれた二人はこの世界から完全に消失。この出来事が仙道茜という少女の運命を大きく変動させ、更には異なる世界の命運をも左右することになるうとはこの時誰も予想だにしていなかった。

## #001 (前書き)

皆様、御久しぶりです。

長期休載の原因だった身体の不調も順調に回復しており、リハビリも兼ねて少しずつではありますが、『最優の鍛冶師』を現在進行形で執筆しております。

連載再開と共に、若干ストーリーを加筆修正致しましたので宜しければ御覧下さい。



「んう……え、此処は？」

茜が次に目を覚ましたのは、埃や染み一つ無い真っ白で不可思議な場所。足は地に着いておらず、奇妙な浮遊感が少女を困惑させていた。地面が存在しない為、地平線も確認できず、もしかしたらこれは自分が見ている夢なのではと都合のいい解釈が頭をよぎるが、横合いから不意打ちざまに掛けられた声に驚き、樂觀的な考えなどを霧散する。

「目を覚ましたようだな」

「あ、貴方は？（今の今まで、全く気配を感じなかった。何、このプレッシャー威圧感……）」

先程、茜が周囲を見回した際は誰も居なかった筈。だが、その男は最初から居たぞとばかりの、存在感を放っていた。声の主は、黒塗りの煙管キセルをくわえ、無精髭を生やした、外見年齢三十代後半の成人男性。左目を覆い隠す黒い眼帯に金糸で刺繍された龍が威つさを際立たせ、まるで気質な職人みだいたという第一印象を茜に抱かせる。また同時に、彼女の祖父のような武芸を極めた達人と対峙した際に感じていたモノとは桁違いの覇気を肌で感じていた。

しかし今まで積み上げてきた修練の成果か、眼前の正体不明の人物に対して身体は畏縮せず、自然と戦闘体制へと移行していく。茜

自身、この不安定な状態で満足な攻撃が出来るとは思っていないが、先手を打つならば素早く相手の急所に一撃を叩き込まなければならぬ。

覚悟を決め、相対する者の一挙手一投足を見逃すまいと平静を装いながら注視していると、遂に男が口を開いた。

「我の名は『天之麻比止都禰命』、又は『天久斯麻比止都命』。

まあ、長つたらしいから『天目一箇』で構わんぞ。我もそつちの方が気に入っている」

彼が名乗ったのは日本神話に於いて製鉄・鍛冶を司る神の御名。

当然、疑って掛かるべきなのだが、少女には目の前の自らを神と称する男が虚言を繰っているとは思えなかった。それは偏に、その独眼で悠然とこちらを見つめる天目一箇から継続して発せられている覇気に、敵意や悪意等の負の感情が一片も感じられなかった為である。ただ、祖父程ではないにしろ幼少から培ってきた心眼でも、天目一箇の内面を僅かも窺えないことに茜は驚愕してもいた。

そこで、不可解な人物であることに変わりはないが、容姿から目上だと思われる人間？に対して著しく礼節を欠いていたことに気が付き、取り合えず佇まいを正して挨拶を返す。

「ご無礼、失礼しました。

私の名は仙道茜と申します。以後、お見知りおきを」

「カカ……そう畏まるな、これから永い付き合いになるのだからな

(この状況で、物怖じしない豪胆さ……面白い)「

「天目一箇殿、お聞きしたい事が山ほどあります」

「勿論だ。お主の今後の人生に深く関わることだからな」

少女の真剣そのものの問い掛けに、その元々厳つい表情を更に陰しくした男性神は徐々に此度の顛末に付いて語りだした。

天目一箇から語られた、茜自身が今現在置かれているという状況は荒唐無稽さえも通り越して常軌を逸してさえた。さもありません、彼女はこれから慣れ親しんだ国、いや世界とは全く異なる場所へと誘われようとしていたのだから。

「異世界召喚、ですか？」

ネットや所謂二次元的な文化に見たり触れたりした機会がなく、電子機器類特にパソコンすらも満足に扱えない茜にしてみれば、『異世界』『召喚』などの単語はそれ単体として意味は理解できるが、合わさってしまえば解読不能な熟語に早変わり。要するに彼女にとってはファンタジー、所謂空想の産物などに類する知識は幼い頃に読み親しんだ日本昔話やグリム童話などの御伽噺止まりなのだ。

一生懸命理解しようと眉間に皺を寄せる少女を見て苦笑した天目一箇が再び口を開く。

「ま、お主の経歴からして今直ぐ理解しろってのは無理な話だろう。追々、実感することになるだろうから焦ることはない」

「?????……天目一箇殿は私のことをご存じだったのですか？」

「大凡だが把握はしている。

人の眼には殺風景に映るかもしれんが、此処は生命が芽吹く内郭世界『出雲』<sup>いずせ</sup>を守護し記録する役目を負った八百万の神々が住まう外郭世界『高天原』<sup>たかあまはら</sup>。出雲に存在する生命体の情報をデータベース化し保存して在る」

そうして、何も無い筈の空間から徐に引つ張り出されたのは、黒表紙で相当な厚みがある一冊の本が茜の手に渡される。タイトルには『仙道茜』と記されており、天目一箇に促され目を通していくに従って、彼女の眼が見開かれていく。

「これは……私の歴史!？」

「その通りだ。尤も、記されているのは人間の上辺部分だけ、これだけで本質を見極めることはできんがな」

記されていたのは、箇条書きで綴られた仙道茜という人間の之まで歩んで来た人生そのもの。何時何処で生を受け、誰と如何様な会話を交わしたか、等まで事細かに刻まれていた。

次々と明かされていく世界の仕組みに少女は驚きを隠せなかったが、努めて平常心を保ちながら与えられる情報を自分なりに噛み砕いて吸収していく。

と、そこで一緒に謎の渦に飲み込まれた筈の幼馴染みのことを今更ながらに思い出す。現状把握に精一杯の茜にとっては心底どうでもよかつたものの一応直也の安否を確認してみるが、帰ってきた天目一箇の反応は明らかな侮蔑が入り混じったものだった。

「そつえば、直也は……」

「あの男なら、直ぐ傍で奴担当の者から同じ説明を受けとるだろうよ。今、お主に会わせる気は更々ないがな」

静かに、だが相当な憤怒に身を震わせる彼が次に紡いだ言葉には、彼女自身何となく察していたとはいえども認めたくない真実と覆らない現実が含まれていた。

「巻き込んでおいて 二度と故郷の地を踏めない境遇にしておいて、その癖まだお主に会わせるなどとぬかしておるわー!!」

「そう……ですか」

二度と我が家に帰れないことには深い悲しみを、このような状況に置かれて尚、自分に執着を示す男に対しては酷い憤りを抱いた少女も、まるで自分の事のように怒りを露わにし、同時に嘆いてもくれる壮年の男性に少しだけ救われる思いだった。

数分後、未だ頭に血が上っている様子の天目一箇が落ち着きを取り戻すまで、茜は現時点で与えられた情報を元に、彼女なりの注釈を加えた推察に意識を傾けていた。

「（現時点で判明したことは五つ……一つ、異なる世界の何者か召喚という言葉から第三者の意志が介在していると推測　が何らかの目的で直也に対し光の渦を発生させ拉致紛いの誘拐を企てたこと……二つ、それを図らずも阻止しようとする形となった私は不運なことと一緒に飲み込まれてしまったこと……三つ、私の現在位置は

元居た内郭世界『出雲』を覆う八百万の神々が住まう外郭世界『高天原』だということ……四つ、直也は近くに居るものの、天目一箇の気遣いで位相をずらして隔離されていること……五つ、私はもう故郷へ帰参の叶わぬ身の上だということ)」

一部憶測が入り混じっているものの、少女の推察は可也正解と言っても差し支えない程、正確に物事を捉えている。ただそうすると当然新たな疑問が浮上してくるのは必定。

自分のことのように怒り悲しんだが因に、煙管キセルから黙々と白煙を吹き出し、高ぶった感情の鎮静化を計っている男神には申し訳なく思う茜だったが、脱線してしまった話を元の路線へと戻すことにした。

「それで天目一箇殿、早急にお聞きしたい事が二、三あるのですが、宜しいでしょうか？」

「……………スマンスマン、昔からこう頭に血が上りやすい質たちでな」

不敬だと分かってはいるが、見た目以上に人間臭い神様だな、という思考が少女の脳裏をよぎったのは言うまでもないだろう。実際、この数度の会話だけで、茜の警戒心を薄れさせ、親近感すらも芽生えさせたのだから、ある意味で男の徳の高さの表れかもしれない。

「いえ、気になさらないで下さい。それに……………」

「それに？」

「な、何でもありません。（嬉しかったですから、何て気恥ずかしくて言える訳がないでしょう）」

相手に悟られない程度に、頬を薄つすらと赤く染めた少女が、パタパタと手を扇ぐようにして誤魔化していると、天目一個が顔をしかめて煙管キセルを逆さに吸い殻を払い落とした。

と同時に、何事かと問い掛ける彼女の腕をガツシリと掴んで、突如足下に出現した真っ黒な何かに飛び込んだ。

「ええい、奴め、もう出立する気か。征くぞ、茜！！」

「あ、ちょ……きゃあっ!？」

突然のことに全く反応出来なかった茜は、思わず出てしまった可愛らしい小さな悲鳴だけを残して、短い滞在時間ではあったが高天原を後にし、生まれ育った世界と完全に決別したのであった。



## #001 (後書き)

今後の執筆活動の励みにもなりますので、感想や評価を頂けると幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1594v/>

---

最優の鍛冶師

2011年12月8日00時56分発行